

◇東京大付属病院准教授、放射線医学 中川恵一 崩壊した「ゼロリスク社会」神話 [原文提供不可]  
◎毎日新聞 2011年05月25日 夕刊◇4面 見出し4段 写



中川 恵一

これまで日本は「ゼロリスク社会」だといわれてきた。この言葉は「(生存を脅かす)リスクが存在しない社会」ではなく、「リスクが見えにくい社会」を意味する。そもそも生き物にとって、死は最大のリスクといえる。私たちに「リスクが存在しない」はずがないのだ。

たしかに、急速な近代化や長寿化など、さまざまな要因が重なった結果、私たちはリスクの存在に鈍感になっている。日本人の半数が、がんになるというのに「がん検診」の受診率は2割程度(欧米は8割)にとどまる。根底には、私の恩師の養老孟司先生も指摘する「死ぬつもりがない」といった歪んだ死生観があるのではないかと

も思う。しかし、ときに「垣間見える」リスクに対して、日本人は過敏な反応を示すことがある。たとえば、抗菌グッズやアンチエイジングが大人気なことが代表的な例だろう。リスクへの、こうした両極端な反応は、まさにアンバランスだ。

今回、東京電力福島第一原発の事故で、突然降ってわいた「放射線被ばく」というリスクに、日本全国が大騒ぎをしている。この社会に「リスク」などないというリスククエスチョンが、日本全国で大騒ぎしている。この社会に「リスク」などないというリスククエスチョンが、日本全国で大騒ぎしている。

## 崩壊した「ゼロリスク社会」神話 放射線被ばくの試練 プラスに

た結果、私たちはリスクの存在に鈍感になっている。日本人の半数が、がんになるというのに「がん検診」の受診率は2割程度(欧米は8割)にとどまる。根底には、私の恩師の養老孟司先生も指摘する「死ぬつもりがない」といった歪んだ死生観があるのではないかと

も思う。しかし、ときに「垣間見える」リスクに対して、日本人は過敏な反応を示すことがある。たとえば、抗菌グッズやアンチエイジングが大人気なことが代表的な例だろう。リスクへの、こうした両極端な反応は、まさにアンバランスだ。

今回、東京電力福島第一原発の事故で、突然降ってわいた「放射線被ばく」というリスクに、日本全国が大騒ぎしている。この社会に「リスク」などないというリスククエスチョンが、日本全国で大騒ぎしている。

（なかがわ・けいいち  
東京大付属病院准教授、放射線医学）

私たちの身の回りに、放射線以外にも「がん死亡率を高める」リスクが存在する。たとえば、野菜は、がんを予防する効果があるが、野菜嫌いな人の発がんリスクは10割程度の被ばくに相当する。受動喫煙も100割に近いリスクだ。

また、肥満や運動不足、塩分摂りすぎは、200割、500割の被ばくに相当する。たばこを吸ったり、毎日3合以上のお酒を飲むと、がん死亡のリスクは1.6〜2倍上昇するが、これは2000割の被ばくに相当する。つまり、放射線被ばくのリスクは、他の巨大なリスク群の前には「誤差の範囲」といえる程度だ。特に、100割より少ない放射線被ばくのリスクは、他の巨大なリスク群の前には「誤差の範囲」といえる程度だ。

「ゼロリスク社会」日本」の神話は崩壊した。しかし、今回の原発事故は、私たちがリスクに満ちた限りある「時間」を生きていることに気づかせてくれたとも言える。たとえば、がんになって人生が深まったと語る人が多いように、リスクを見つめ、今を大切に生きることが、人生を豊かにするのだと思う。日本人が、この試練をプラスに変えていけることを切に望む。